

質的データ分析ワークショップ：

M-GTAにおける談話分析の援用

2020年9月10日(日)13:30-15:30(於:オンライン)

多文化関係学会中部・関西支部研究会(委員長:宇治谷映子先生)

話題提供者: 石黒武人(武蔵野大学 グローバル学部)

WSの構成

理論編：

- 1) 質的研究について：言語との関係、背景にあるパラダイム、問題の所在：「厚い記述」
- 2) 本発表の目的：方法同士の接合による解釈の深さ（社会指標的側面の分析）→記述の厚み
- 3) M-GTAについて： M-GTAの特徴、他領域の分析概念導入の前提・妥当性

実践編：

- 4) 分析・解釈の実践(1)： M-GTAの分析ワークシートの使用
- 5) 分析・解釈の実践(2)： 談話分析の概念の併用
- 6) メタ・コミュニケーション意識とリフレクシヴィティ
- 7) ディスカッション

自己紹介

- ・専門: 異文化コミュニケーション学、対人・組織コミュニケーション(組織ディスコース研究)
 - ・研究手法: 質的研究法(ライフストーリー・インタビュー、グラウンデッド・セオリー・アプローチ[M-GTA, C-GTA]、談話分析)⇒説明モデルの構築
-

・研究トピック:

1) 日本国内に存立するグローバル/多文化チームの日本人リーダー (石黒, 2012; 2020)

→ライフストーリー・インタビュー、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

2) 「コンテクスト・シフティング」(Context shifting) (石黒, 2016) →理論的考察

3) 文化間の仲介者が持つトランスカルチャラル・アイデンティティの機能 (石黒, 2015) →談話分析

4) ファシリテーションによる異文化コミュニケーション能力の醸成 (石黒, 2013) →理論的考察

・志向性: 少数派への関心、認識世界の構造化への意志、

諸知見を論理整合的に組み合わせる(知のエディターシップ)

・その他: 熊本県出身。オレゴン大学(University of Oregon)大学院にて開発学を学び、立教大学大学院で異文化コミュニケーション学を専攻。英会話講師、大学非常勤講師など経て、現在に至る。

趣味は映画・音楽鑑賞、サッカー観戦、古流の理合に基づく空手(二聖二天流柔術憲法)。8歳児の父。

理論編

今回のWSは以下の論文・書籍の内容を中心に構成されています：

- ・石黒武人(2017).「修正版グラウデッド・セオリー・アプローチにおける「厚い記述」への近接『順天堂グローバル教養論集』, Vol. 2, 88-96.
- ・石黒武人(2017).「国内で活動する多文化研究チームにおける日本人リーダーの認知的志向性とその動態」『多文化関係学』, Vol. 14, 41-57
- ・石黒武人(2020).『多文化チームと日本人リーダーの動的思考プロセス：グラウンデッド・セオリーからのアプローチ』春風社

「質的研究」という営み 質的研究と言語の関係について(1)

質的研究→「現象を言葉を用いて近似値的に説明しようとする営み」(cf. 西條, 2007; 2008)。

質的データ → 言語(言語・非言語記号)

→ 瞬時である(vs. 数値) + イメージの同型性(共通了解)を担保できる

同型性→ 共通性・社会性; 時間的・地域的な特殊性

背景: 言語=「社会の共有物」(倉石, 2005, p. 47)、

「言語システムとしてのヒューマンシステム」

(アンダーソン, H., & グリーシヤン, H., 2013, p. 18)

→ 言語=認識世界を一定のルールで恣意的に分節化し、秩序化している

→ 現象の立ち現れ方に影響を与える

例: 赤ちゃんの手、虹の色、cf. 言語相対論、記号論における分節恣意性、対応恣意性

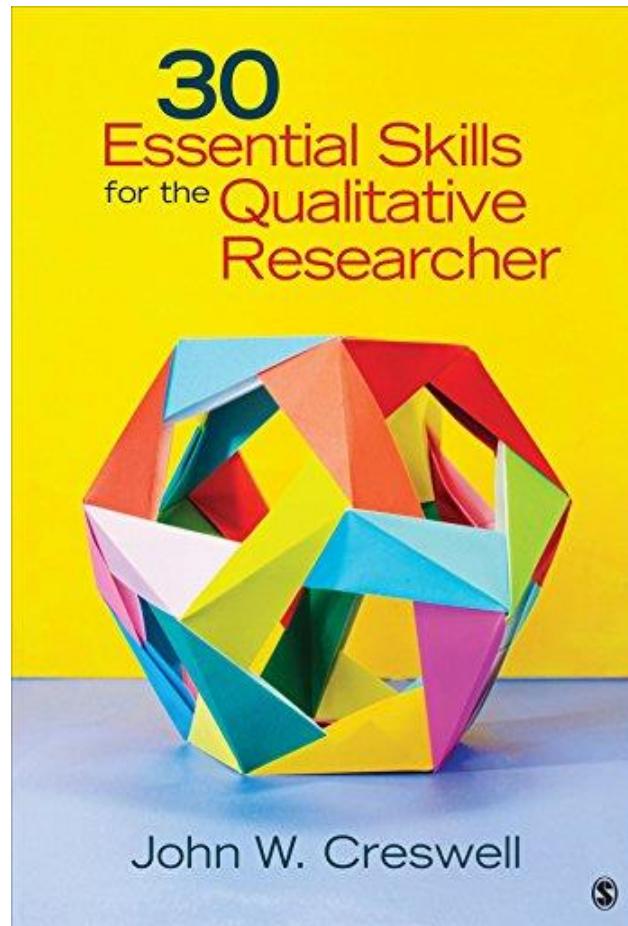
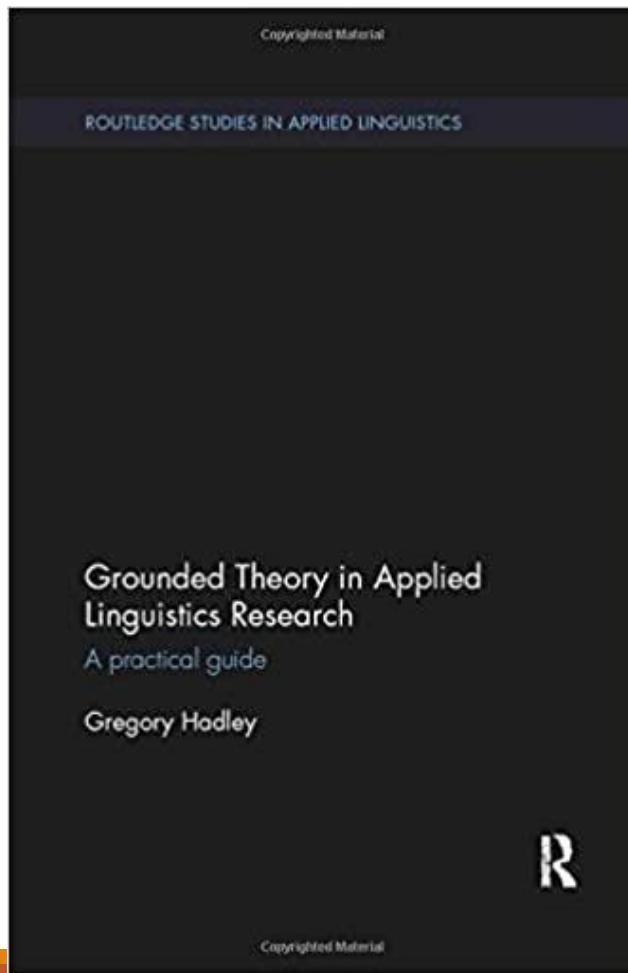
質的研究と言語の関係について(2)

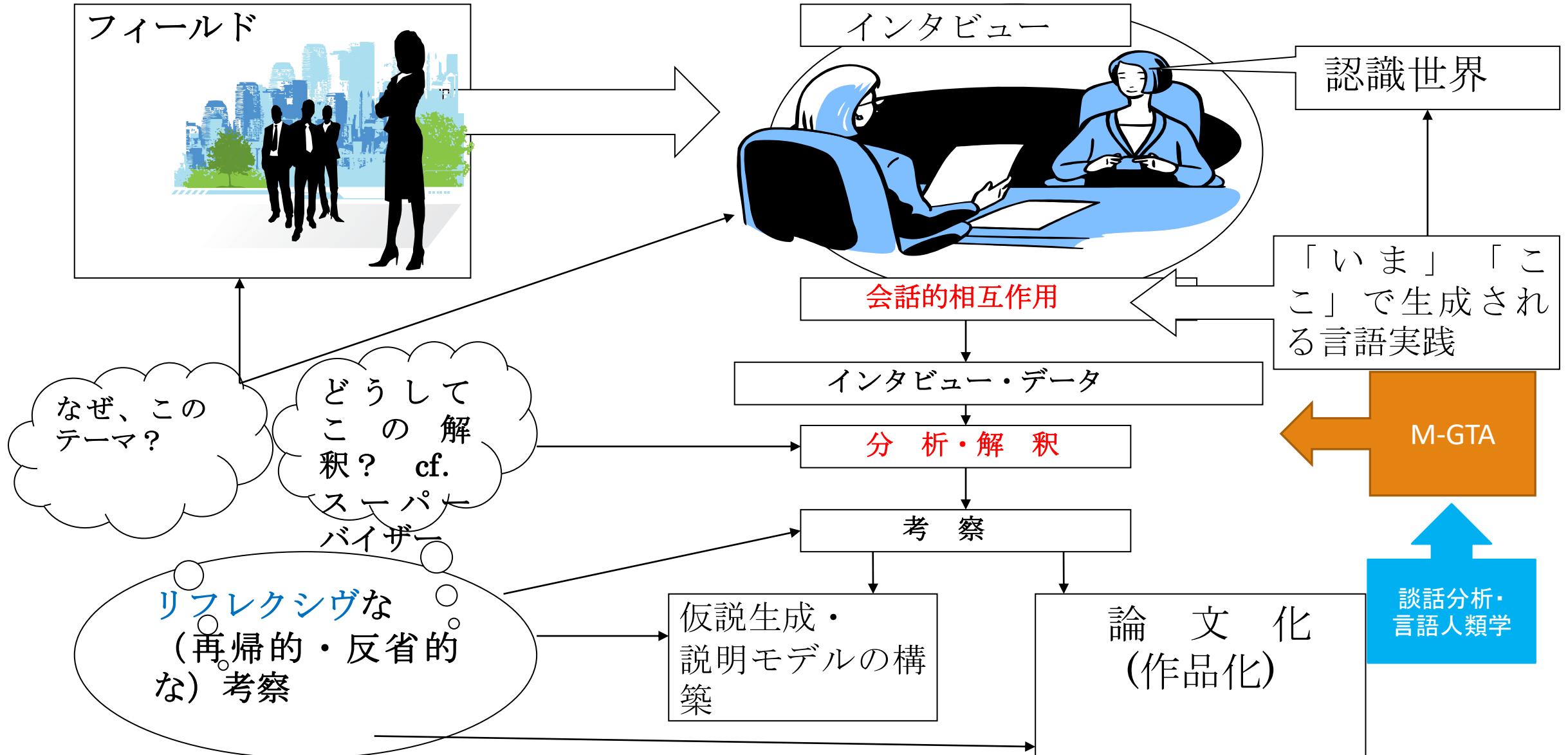
質的データ → **言語使用(表現・行為)** → ルール(秩序)あり
→ 同一化(パターン化)、もしくは差異化(バリエーションの指標)
・同一化 → 社会・文化的側面 → マクロ
・差異化 → 個別性・独自性 → ミクロ (異社会・文化的側面 → マクロ)
言語/データの分析 → **個別性の記述**に加え、
個別性の表現に介在する**社会的側面**を拾い上げ、
ある特定の経験をしている集団の人々が見ている
(実体視している)世界やそれを成立させる認識構造について、
一定の説明モデルを構築可能

研究パラダイム (Cresswell & Plano Clark, 2011, p. 42) と質的データ

世界観 パラダ イム	存在論 Ontology	認識論 Epistemology	価値論 Axiology	方法論 Methodology	レトリック Rhetoric
ポスト実証主義(社会科学アプローチ)	単一の現実	客観的な現実の把握	中立性	仮説検証タイプの量的研究	科学論文のフォーマルなスタイル
構成主義(解釈的アプローチ)	複数の現実	相互構成的に現実を把握	研究者のバイアスを自覚	仮説生成タイプの質的研究	インフォーマルなスタイル
参加型(批判的アプローチ)	政治的現実(権力関係、差別、社会的不公正)に焦点	問題を解決するために(研究対象者と研究者が)協働	研究者のバイアスは研究対象者と折り合いをつける形	調査のすべての段階で研究対象者が関わる形	アドバカシー(権利擁護)と問題状況の変革を促す表現
プラグマティズム	単一と複数両方の現実の可能性を認める	研究の目的に基づく適切な現実の把握	価値中立とバイアス両方の可能性を認める	量的・質的研究両方の利点を生かす形	目的に応じて、フォーマル、インフォーマルの双方もしくはいずれか

参考図書(研究パラダイムと研究法の関連性について)





WSの内容:一言でいうと?

木下(2003)が提唱する**修正版グラウンド・セオリー・アプローチ**(modified grounded theory approach, 以下略してM-GTA)に、文化の解釈を射程とする異領域の分析概念を接合し、後述する「深い解釈」ひいては「厚い記述」を可能にするための方法をご紹介する。

M-GTA

ある特定の経験をしている集団のフィールドに入り、そのメンバーからインタビュー等を用いてデータを収集し、そのデータに基づき、当該集団に属するメンバーの経験とその意味に関する「領域密着型理論」(木下, 2003, p. 19)を生成する研究方法である。

～GTAから継承したもの(木下, 2007, p. 29)

- 1) 理論生成への指向性、2) grounded-on-dataの原則、
- 3) 経験的実証性(≠ポスト実証主義): 人びとの感覚的な理解を重視
- 4) 応用(分析的結果の実践的活用)が検証の立場

M-GTAによるGTAの課題点の克服 (木下, 2007, p. 28)

- 1)コーディング方法の明確化(分析プロセスの明示)→**分析ワークシート**の導入
- 2)意味の深い解釈
- 3)60年代の限界(素朴な客観主義)→近年の質的研究の動向に対する独自の認識論(**インターラクティブ性**) 権力関係、調査者(「研究する人間」)の影響力、被調査者への配慮、「多元的自己」(桜井,2002)

M-GTAにおける文脈重視の立場

木下(2003; 2005; 2007; 2014)は、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(grounded theory approach, 以下GTA, cf. Glaser & Strauss, 1967, Glaser, 1978; 1992, Strauss, 1987, Strauss & Corbin, 1990, Charmaz, 2006, 戸木, 2006)の提唱者であるグレーザーとストラウスによる『データ対話型理論の発見』(オリジナル版、1967年発表)の枠組みを継承しつつ、そこでは十分に示されなかつた「文脈性」(木下, 2007, pp. 30-31)を重視した分析や「研究する人間」(木下, 2003, pp. 43-53)の位置づけを明示し、「深い解釈」や「分厚い記述」を実現しようと試みている(木下, 2007, p. 19)。

「厚い記述(thick description)」 (Geertz, 1973)

厚い記述は、対象とする集団の文化について単にディテールが書かれたものではない(cf. 佐藤, 2008)。厚い記述は、対象となっている集団の一見不可解な社会的表現を理解可能な形に変えるため、目に見えない文化的な営為を解釈して示すことである(cf. 木下, 2005)。

「どのようなもの」で「どうなっているか」という表層的な記述 + 「なぜ、
そうなっているのか」(佐藤, 2008, p. 13)という文化の深層にかかる
記述である。

e.g., おみやげに対するフィリピン人の友人の反応

記述の厚みや解釈の深さを妨げるもの

しかしながら、この厚みや深さに至る分析・解釈の具現化が多くの研究者にとって難題である。

とりわけ、コーディングといわれる、インタビューの一部をその部分の特徴を適切にいいあて概念化する過程において、解釈の深さを妨げうる2つの傾向が見られる。

コーディング/コード化(coding, 分析・解釈)

「データをその構成要素に分解し、取扱いやすい大きさの断片に切り分け、切り分けた断片の特徴を識別し、命名する手順である」（シュワント, 2009, p. 79）

コード化とは、「ひとつのフレーズ、ひとつの段落、あるいはストーリー全体にコードをつけるもので、さしあたりライフストーリーの要所要所に小見出しやタイトルをつけるときには、（中略）語り手の表現を借用してコード化をおこなっている」（桜井, 2005b, p. 159）。

⇒**インビボ・コーディング** ※わたしの経験：「よきこと」vs.「よいこと」 言葉の変更によるデータ／ディスコースからの乖離→無自覚な文脈性から乖離

インビボ：invivo（ラテン）：研究対象が生体に自然なまま置かれる状態を指す語。

1つ目の傾向

コーディングにおける言及指示的側面への焦点化

背景にある文化を含めた**文脈的要素の多くが捨象**され、
インタビューで**語られたこと**(what is said)を単に整理して
概念化するパターンである。

その場合、語られたことに介在している社会・文化的コンテキストを読み取り、解釈の厚みを出す学術的営為が欠落し、解釈に厚みが出にくい。

2つ目の傾向 既存理論・概念による “Forcing”(Glazer, 1992)な学術営為

これまで提示されてきた社会学的解釈のレパートリー（マイナリティに関する理論、パワーと支配など）をデータにあてはめて解釈する営みを主とした研究がある。

これは、既存の解釈レパートリーや理論（グランド・セオリー）に、データが適切にあてはまる際に活用されるアプローチであるが、データが既存理論では説明できないような新規な側面をもっている場合にも、その新規性を無視し、もしくは無意識に見過ごし、既存理論の説明で新規性を回収してしまう危険性を孕んでいる。

e.g., 「日本人」vs.「外国人」と「社会アイデンティティ理論」

分析・解釈ツールの追加の必要性

前者の「語られたこと」のみに焦点化した帰納的なコーディングも、後者の既存理論をあてはめるforcing (cf. Glaser, 1992)な演繹的なコーディングもM-GTAが志向する*grounded-on-data*で、かつ、深い分析・解釈につながりにくい。Cf. 「先行研究を読むな！」

この2つの傾向の不適切な乱発を避けるための分析・解釈ツール(仕掛け)の追加が必要ではないか？

GTAの登場理由と既存概念の使いづらさ

GTAは、先行研究に依拠した仮説を検証して提示される抽象的理論であるグランド・セオリーに対抗し、データから立ち上がる(emergent)仮説を生成するためにコーディングをし、ある特定の集団、領域に属する人びとの意識や行動を説明、予測する領域密着型理論を作り出すねらいがあり登場した。Cf. Glaser とMertonの関係＋シカゴ学派

それゆえ、GTAを用いる多くの研究者の意識としては、データから立ち上がる概念を生成するコーディングのやり方を強く意識するあまり、既存の分析概念を安易に適用しない傾向がある。したがって、実はデータと対話し、背景にある文化を含めた深い分析・解釈の助けとなる他領域の分析概念をGTAと併せて援用しづらい状況がある。

本WSの目的(再確認)

「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」に、**他分野である談話分析の分析概念を接合し**、深い解釈と厚い記述を試みることである。

この試みは、分析概念をデータにあてはめて、その特徴を説明する forcingな営みではなく、分析概念を使い、**語られたこと(what is said)**のなかに**非明示的に介在する文脈性(社会関係、文化、アイデンティティ)**を、**インタビューの過程で語り手によって「なされていること」(what is done)**を手がかりに浮かび上がらせ、解釈に深みを出し、記述に厚みをもたせるものである。

この後の手順

- 1) M-GTAを概説し、M-GTAに他領域の概念を接合する妥当性について説明し、
- 2) 通常のM-GTAの分析カテゴリーシートに基づいて、
参加者の皆様とデータ分析・解釈します。
- 3) 他分野の分析概念を用いて、
参加者の皆様とデータを再分析し、解釈します。
結果、他分野の分析概念を援用した
領域横断的方法の効果を検討します。

M-GTA生成のプロセス

M-GTAは、**インタビュー・データ(生データ)**から複数の似通った**具体例(variations)**を同定し、それらの具体例を包括的に説明できる**概念(concepts)**を生成し、つぎに、概念同士の関係性をいいあてる**カテゴリー(categories)**を作り、さらに、カテゴリー間の関係性を考察して現象(対象としている人びとの意識や行動)を構成する**プロセス(process)**を結果図として示す。

図1: 分析のまとめ方

(木下, 2007, p. 209を基に発表者が作成)

明らかにしつつ

あるプロセス

カテゴリー生成

概念生成

生データ

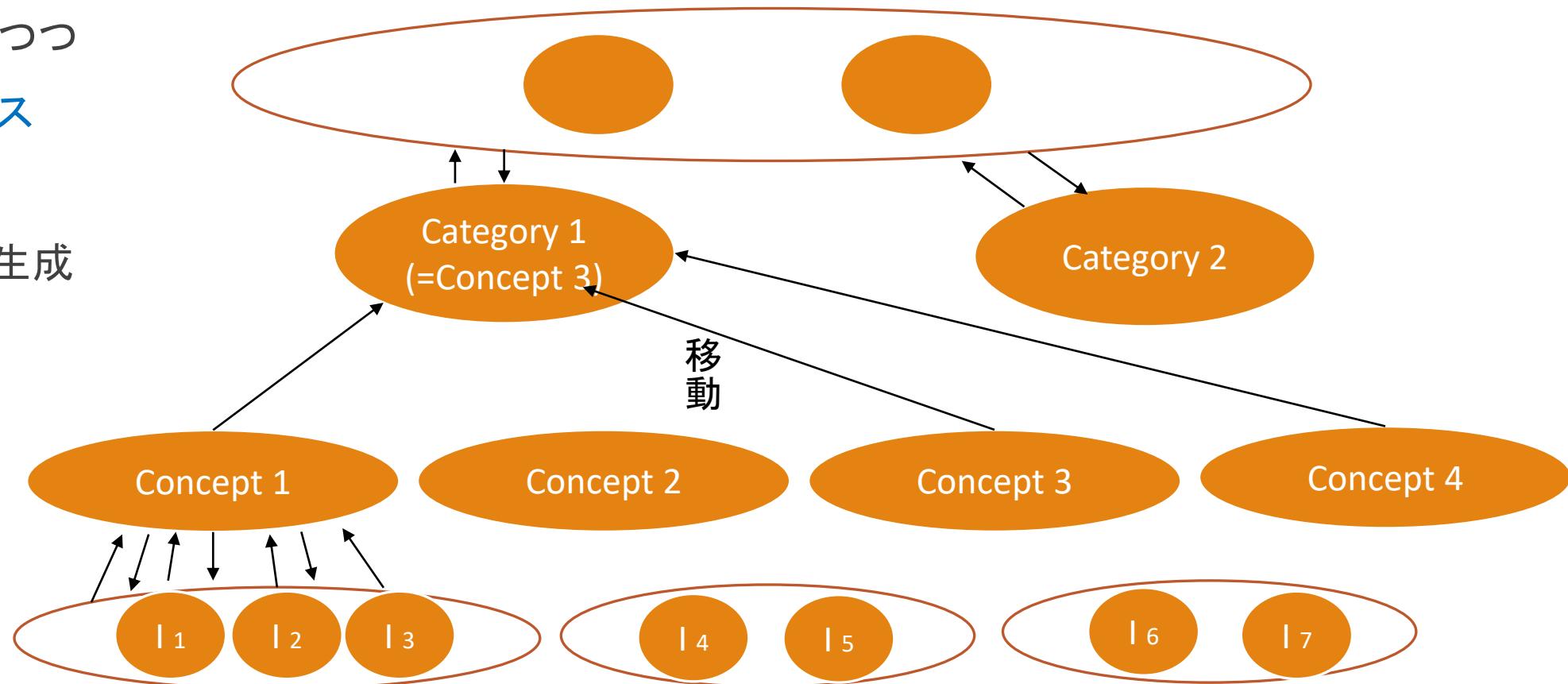
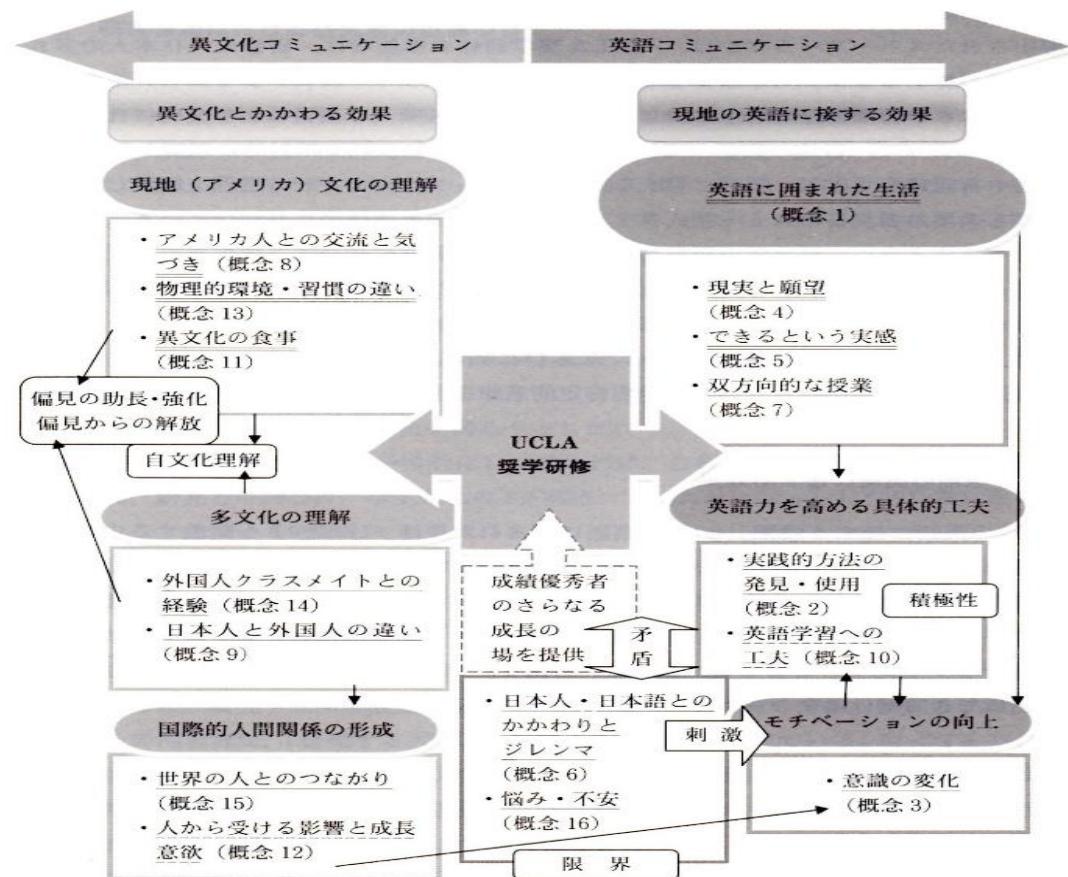


図2:結果図の例(UCLA奨学研修における学生の経験)(石黒・山下・川成, 2012, p. 116より)



アメリカの大学付属英語研修プログラムに**3週間** 参加した**学生の意識と行動の傾向**を説明する結果図の例を見てみよう。図1では、**概念**（例：「現実と願望」）、**カテゴリー**（例：「多文化の理解」）、**プロセス**（結果図全体）が示されている。

M-GTA独自の試み：分析ワークシート

データの分析・解釈を深めるためのツール。

分析ワークシートは、「概念名」、「定義」、「バリエーション」、「理論的メモ」という4つの項目によって構成される(次頁の表1)。

具体的な手順：

- ① インタビュー・データから研究の目的に応じて抜き出した事例を分析ワークシートの「バリエーション」に書き入れる。
- ② 複数の類似した事例を説明できる「定義」を考案する。
- ③ 定義を短く伝える「概念名」を案出する。
☞「概念名」がバリエーション、つまり、データに基づいて生成される。
- ④ バリエーション(事例)同士の関係、概念と他の概念の関係などに関するデータ分析中に想起するアイデアをメモし、研究における思考過程を外在化し、記述する箇所が「理論的メモ」である。

表1：分析ワークシートの例
 (木下, 2007, p. 241の表を基に筆者が作成)

概念名	夫介護者への社会的関心の広がり
定義	夫が家事介護をしていることに外部者が関心を持ち始めたことへの驚き
バリエーション (具体例)	* 夫の方が家事や介護をしてるっていう点ね。まあこれからの社会、こういうのは当たり前になるんでしょうけどね、やはりこの夫の方がっていうところでちょっと、あのー、もうって言うかね、あのー関心を持っている人達もいるんだなってこと研究の手が、あのー、ちょっと驚きましたね。(A氏、1頁) <u>☆通常は、類似例がこの下に並ぶ</u>
理論的メモ	・介護の当事者になると、自分の日常的生活空間とその中の生活が中心となり、 関心が内側方向に 、時には、 閉塞的 になりやすいが、自分の現在の状況について 外側からの関心が示されていることに気が付く のだとすれば、その意味は何か？(以下省略)

分析ワークシートの効用: 研究プロセスの透明性を高める

分析ワークシートを用いることで、どのデータから概念が生成され、生成のプロセスでいかなる思考過程があったかを明示化できる。これは、**ブラックボックス化**しがちであった概念生成の過程をオープンにでき、**研究を評価する読み手や理論(結果図)**を用いる応用者たちが、**概念、カテゴリー、結果図**の妥当性を検討しやすくなる。

とはいえ…「深い解釈」か？

概念名

夫介護者への社会的関心の広がり

定義

夫が家事介護をしていることに外部者が関心を持ち始めたことへの驚き

バリエーション(具体例)

* 夫の方が家事や介護をしてるっていう点ね。まあこれからの社会、こういうのは当たり前になるんでしょうけどね、やはりこの夫の方がっていうところでちょっと、あのー、もうって言うかね、あのー関心を持っている人達もいるんだなってこと研究の手が、あのー、ちょっと驚きましたね。(A氏、1頁)

理論的メモ

・介護の当事者になると、自分の日常生活空間とその中の生活が中心となり、関心が内側方向に、時には、閉塞的になりやすいが、自分の現在の状況について外側からの関心が示されていることに気が付くのだとすれば、その意味は何か？(以下省略)

分析概念導入の前提・妥当性

調査者と調査協力者のやりとりも含めて、バリエーションに記録することもあるM-GTAの分析カテゴリーシートはよくできている。

しかしながら、やはり背景にある文脈性（社会関係、文化、社会的アイデンティティ）を分析（分け出して）、解釈（意味づけ）しようとするとなかなか難しい、という声がある

→他領域の分析概念を導入する前提や妥当性は？

- 1) 文脈性を浮かび上がらせる分析概念の存在
- 2) M-GTAの提唱者木下氏による目的による方法修正論

記述の厚みを生む社会指標的側面 (cf. シルヴァスティン・小山, 2009)

記述の厚みを生む深い解釈とは何であろうか？

シルヴァスティン・小山(2009)が提示したコミュニケーションの言及指示的側面と非言及指示(社会指標)的側面という見方に依拠し、深い解釈について考察したい。

インタビューやその他のテクストが構築されるプロセスでは、語り手がなんらかの対象をことば(や非言語)で指示し、その対象について述べる。その「いわれていること(what is said)」を言及指示的側面といい、いわれていることと重なりあうように同時に行われていること、「なされていること(what is done)」を社会指標的側面という。

例:「マジで」と社会(世代)的アイデンティティ

日本語話者の若者によって使われる「マジで」という語彙を伴う発話行為は、**それ行為 자체がその使用者が持つ社会(世代)的アイデンティティを明瞭に指標する**(別の世代 [高齢者] が用いると、また特別な意味が指標される)。

コミュニケーションで指標される文化的営為を理解するには、**言及指示**(「マジで」が指示す「本当に?」という意味)と**社会指標**(ある世代に属している、もしくはあるフォーマリティを好む社会集団に属するという社会的アイデンティティ)の両側面をとらえる必要がある(cf. シルヴァステイン・小山, 2009)。

例:「かなり」のアクセントと「ちこいち」

「かなり」と「かなり」 東京近郊の若者
はどちら? (井上, 2005)

千葉県にある私立大学のダンスサー
クルで使われる「ちこいち」

社会指標性が指示するもの

社会指標的側面→語りの背景にある社会関係、社会的アイデンティティ、文化的規範などを表し、それらは多くの場合非明示的に(多くの場合、なにげなく、自然に)表現される。

こうした指標の意味を読み解くことで、言及指示的側面と社会指標的側面双方がコミュニケーションする内容を捉え、文化の解釈が深まり、文化を体現する語り手の認識世界の理解につながる。

したがって、社会指標的側面を浮かび上がらせるうえで有効な分析概念が必要となり、本発表では、社会指標性の分析、解釈の助ける分析概念を導入する。

M-GTAに修正を加えることに対する木下 (2007)の見方とその前提

前提: 木下(2007)は、研究者を客観的な分析を中立的な立場からできる存在として位置付けず、研究のプロセスと相互に影響を与える存在であるという見方を示し、「インターラクティブ性」及び「研究する人間」という概念を用いてその位置付けを説明する。

3つのインター・ラクティブ性

- 1) 調査協力者と研究者の相互行為を介してデータが収集される点、
 - 2) データ分析における「分析焦点者」(木下, 2007, pp. 155-159)と研究者の関係、
 - 3) 研究者が提示する分析結果とその応用者とのかかわり、
という3つの点について自覚的にとらえる枠組みが示されている。
- 2)の「分析焦点者」とは、ある特定の集団に属する人びとが経験する現象や彼らの意識や行動を説明、予測するために、その集団に属する人びとを抽象化して表現した存在で、「実在するのではなく、解釈のために設定される視点としての他者」もしくは「内的他者」(木下, 2007, p.92) である。

「分析焦点者」の例➡研究の目的

「分析焦点者」として「日本企業に属し、3カ国以上の多国籍なメンバーで構成されるチームを率いる日本人リーダー」という人物像を「研究する人間」の目的に応じ設定することができる。その分析焦点者が「何をどのように経験するのか」「なぜそのような経験をするのか」といった視点から「研究する人間」がデータを分析・解釈するのである。

研究結果の示し方への影響

3) の応用者とのかかわりについては、理論を応用者に使ってもらい、その妥当性を検証するというプロセスを示すと同時に、**理論が原理的に未完**であり、**常に応用者に対してオープンで修正・更新**されるうるものであることを示唆している。結果図を作成する際も、**応用者の視点を意識しつつ、学術的な用語を応用者にもわかりやすいものに変える**といったメタ語用論的な発想も出てくる。(cf. 多文化バーチャルチーム)

研究者の意図(目的)と方法

インターラクティブ性を敷衍して考えると、**研究者の目的・関心**というものが**自覚的に捉えられることの重大性**に気づかされる。上記3つのインターラクティブ性には、「**何に関心をもち、何を目的に研究を行うか**」という**研究者の意図が介在**するからである。

こうした研究する人間の意図性を「**バイアス**」とし、研究の妥当性を低下させるものとせず、それを自覚的にとらえ、**積極的に認め、活用しよう**とするのがM-GTAの特徴である。そうであれば、研究する人間に「深い解釈」を実現するという意図がある場合、その意図に沿った分析概念をM-GTAの基本的な枠組みに導入するという理路が見えてくる。

M-GTAの枠組み変更に対する木下 (2007)の見方

「M-GTAは手順と技法の形式だけで成り立っているのではなく、基礎におく考え方によって形式が整えられているので、**独自の考えに基づき工夫を施して自分の目的に適したものにしていくのは何の問題もありません**」(p. 11)。

cf. 木下(2003, p. 256); 木下(2005, p. 21)でも同様の指摘あり

M-GTA独自の試み：分析ワークシート

データの分析・解釈を深めるためのツール

分析ワークシートは、「概念名」、「定義」、「バリエーション」、「理論的メモ」という4つの項目によって構成される（次頁の表1）。

具体的な手順：

- ① インタビュー・データから研究の目的に応じて抜き出した事例を分析ワークシートの「バリエーション」に書き入れる。
- ② 複数の類似した事例を説明できる「定義」を考案する。
- ③ 定義を短く伝える「概念名」を案出する。
☞「概念名」がバリエーション、つまり、データに基づいて生成される。
- ④ バリエーション（事例）同士の関係、概念と他の概念の関係などに関するデータ分析中に想起するアイデアをメモし、研究における思考過程を外在化し、記述する箇所が「理論的メモ」である。

実践編：

- 1) まず、「分析ワークシート」に示された「バリエーション」の例を使って空欄を埋めてみます。
 - 2) つぎに、談話分析の分析概念の使い方を確認します。
 - 3) 談話分析の概念を用いて、「バリエーション」を再分析してみます。

分析ワークシートによる通常の分析に挑戦： ※次のスライドになる分析例を見ないでください。

概念名	
定義	
バリエーション (具体例)	* えー少なくとも外国の文化をバックグラウンドに持っている人間とはやっぱ書かなきゃいけないし、具体的にこれとこれをやってとか、フォーマット作るからここにこういうこと入れといまで言わないといけない場面もありますし。(A氏)
理論的メモ	

分析例

概念名	外国人に対する明示的指示の必要性
定義	外国人に対しては明示的な形で指示をする必要性があること
バリエーション (具体例)	* えー少なくとも外国の文化をバックグラウンドに持っている人間とはやっぱ書かなきゃいけないし、具体的にこれとこれをやってとか、フォーマット作るからここにこういうこと入れといで言わないといけない場面もありますし。(A氏)
理論的メモ	外国人とひとまとめにして述べているが、外国人でも明示的指示が必要ない人材はいないのか？

分析ワークシートと談話分析概念の併用

コミュニケーション（インタビュー）で動的に生成される社会関係、文化、アイデンティティを浮かび上がらせ、社会指標的側面を分析するうえで有用であると考えられる分析概念：

- ①フレーム(frame)、②フッティング(footing)、
- ③コンテクスト化の合図(contextualization cues)、
- ④メタ・メッセージ(meta-message)

フレーム(frame)

ミクロ社会学者Goffman(1981)

「各人の経験に基づいて構築されるもので、相手の意図を推論したり、解釈していく際に使われる社会的・文化知識の枠組み(構造)」(高木, 2008a, p. 222)を指し、談話分析や言語人類学でしばしば用いられる。

「期待の構造(structure of expectation)」(Kramsch, 1998, p. 128)

ある場所(e.g., 職場)、場面(e.g., 会議)における参与者(e.g., 上司や部下)の役割(e.g., 評価する側、評価される側)

フッティング(footing)(Goffman,1981)

人びとはコミュニケーションにおいてさまざまな言語・非言語行為を用い、**自分と相手との関係**を示し、変化させている。この関係づけをフッティングと呼ぶ(cf. 梅本, 2008)。

e.g., 呼称(あなた/おまえ)、トピック(プライベートな話)、非言語(対人距離や肩を組むしぐさ)

コンテクスト化の合図

(contextualization cues) (Gumperz, 1982)

「場面における話し手の発話を聞き手が解釈するうえで手がかりとする言語・非言語的伝達記号」(井出, 2003, p. 223)のことであり、通例、複数の言語、非言語記号が共起して解釈の土台となる。

e.g., 窓が閉まっている教室で花子さんが①衣服の袖をまくり(非言語記号)、②汗をぬぐうしぐさをし(非言語記号)、③「暑いね」と窓際の太郎さんを見て話しかけた場合(言語記号)、太郎さんは①から③の共起関係にある記号を土台にし、花子さんの言外の暗示的メッセージは?

メタ・メッセージ (meta-message) (Bateson, 1972)

「言葉の命題的情報ではなく、言外に伝え合う、会話の参与者・状況・内容に対する態度、立場、視点などについての社会的意味を指す」(高木, 2008b, p. 237)。

e.g., 日本人が週末映画に誘われ、「**ちょっと今週末は難しい**」といえば、日本の言語文化フレームに依拠して考えると、その社会的意味は「?」

「フレーム」の援用

各人の経験に基づいて構築されるもので、相手の意図を推論したり、解釈していく際に使われる社会的・文化知識の枠組み(構造)

バリエーション
(具体例)

*えー少なくとも外国の文化をバックグラウンドに持っている人間とはやっぱ書かなきゃいけないし、具体的にこれとこれをやってとか、フォーマット作るからここにこういうこと入れといてまで言わないといけない場面もありますし。
(A氏)

フレーム

たとえば、「外国人には明示的な指示をしなければならない」と考える日本人上司が実は前提としている文化的フレーム(期待の構造)が浮かび上がる。それは、「上司はすべてを言わなくてもよく、部下が上司の意図を察して期待通りもしくは期待以上の仕事をする」という日本社会にある1つのフレームである。

より一般的にいえば、語り手の認識世界で機能している「察しの文化」がこのフレームの背景に見てとれる。

フレーム(続き)

注意:これは、データに「察しの文化」というフレームをかぶせる演繹的な営みではなく、既述のとおりデータから帰納的に順序よく証拠立てていえることである。

この「察しの文化」とは異なる文化をバックグラウンドにもっている人間に対して「明示的な指示をする必要がある」という異文化コミュニケーションのためのフレームも同時に機能している。

さらに、察しの文化を背景とする上司の文化的アイデンティティが指標されると同時に、異文化にも対応できる考え方をもつ者としてのアイデンティティが示されている。→文化やアイデンティティに関する解釈の深さ、記述の厚みが出てくる。

「フッティング」の援用

人びとはコミュニケーションにおいてさまざまな言語・非言語行為を用い、**自分と相手との関係**を示し、変化させている。この関係づけをフッティングと呼ぶ(cf. 梅本, 2008)。

バリエーション(具体例)

* えー少なくとも外国の文化をバックグラウンドに持っている人間とはやっぱ書かなきゃいけないし、具体的にこれとこれをやってとか、フォーマット作るからここにこういうこと入れといてまで言わないといけない場面もありますし。(A氏)

フッティング

「書かなきゃ」や「言わないといけない」といういい方は、部下に対して上司側から必要以上のことをしなければならない、つまり、上司側から相手に合せる形でコミュニケーションをとらなければならない、という「上司が部下に合せる」もしくは「上司が部下のやり方を尊重する」という上司と部下の関係づけ(フッティング)が示されている。さらにいえば、「異文化を背景とする部下に合せる日本人の上司」としてのアイデンティティがインタビューというコミュニケーションの場で達成されている。

「コンテクスト化の合図」の援用

「場面における話し手の発話を聞き手が解釈するうえで手がかりとする言語・非言語的伝達記号」(井出, 2003, p. 223)のことであり、通例、複数の言語、非言語記号が共起して解釈の土台となる。

バリエーション(具体例)

*えー少なくとも外国の文化をバックグラウンドに持っている人間とはやっぱ書かなきゃいけないし、具体的にこれとこれをやってとか、フォーマット作るからここにこういうこと入れといてまで言わないといけない場面もありますし。(A氏)

コンテクスト化の合図

まず、「書かなきゃ」「具体的に」「フォーマットを作るからここにこういうこと入れて」といった記号が共起関係にあり、明示性が求められていることが推論できる。

また、語りには、「やって」「入れといて」という発話行為により、指示に関する内容であることがわかる。

さらに「なきゃいけない」「まで言わないといけない」は「必要性」を推論させる。

以上のように、分析・解釈における思考過程を外在化し、研究の読み手に対してより精緻に証拠立てながら「概念名」に至る推論の過程を示すことができる。

「メタ・メッセージ」の援用

「言葉の命題的情報ではなく、言外に伝え合う、会話の参与者・状況・内容に対する態度、立場、視点などについての社会的意味を指す」(高木, 2008b, p. 237)。

バリエーション(具体例)

*えー少なくとも外国の文化をバックグラウンドに持っている人間とはやっぱ書かなきゃいけないし、具体的にこれとこれをやってとか、フォーマット作るからここにこういうこと入れといでまで言わないといけない場面もありますし。(A氏)

メタ・メッセージ

命題的情報ではなく、言外に伝え合うという観点から、「**外国の文化**」とは対照となる「**自国の文化**」という想定がそこにはあり、上述したように**明示性を必要とする「外国の文化」と対照的な関係にある「非明示的」表現を用いる傾向**がある自文化が言外に伝えられている。

さらに、「**なきゃ**」といった表現から、**必要に応じて部下に合せたやり方に切り替え、異文化に対応する意識をもつ者**という**アイデンティティ**も指標されている。

4つの分析概念を用いた社会指標的な分析・解釈

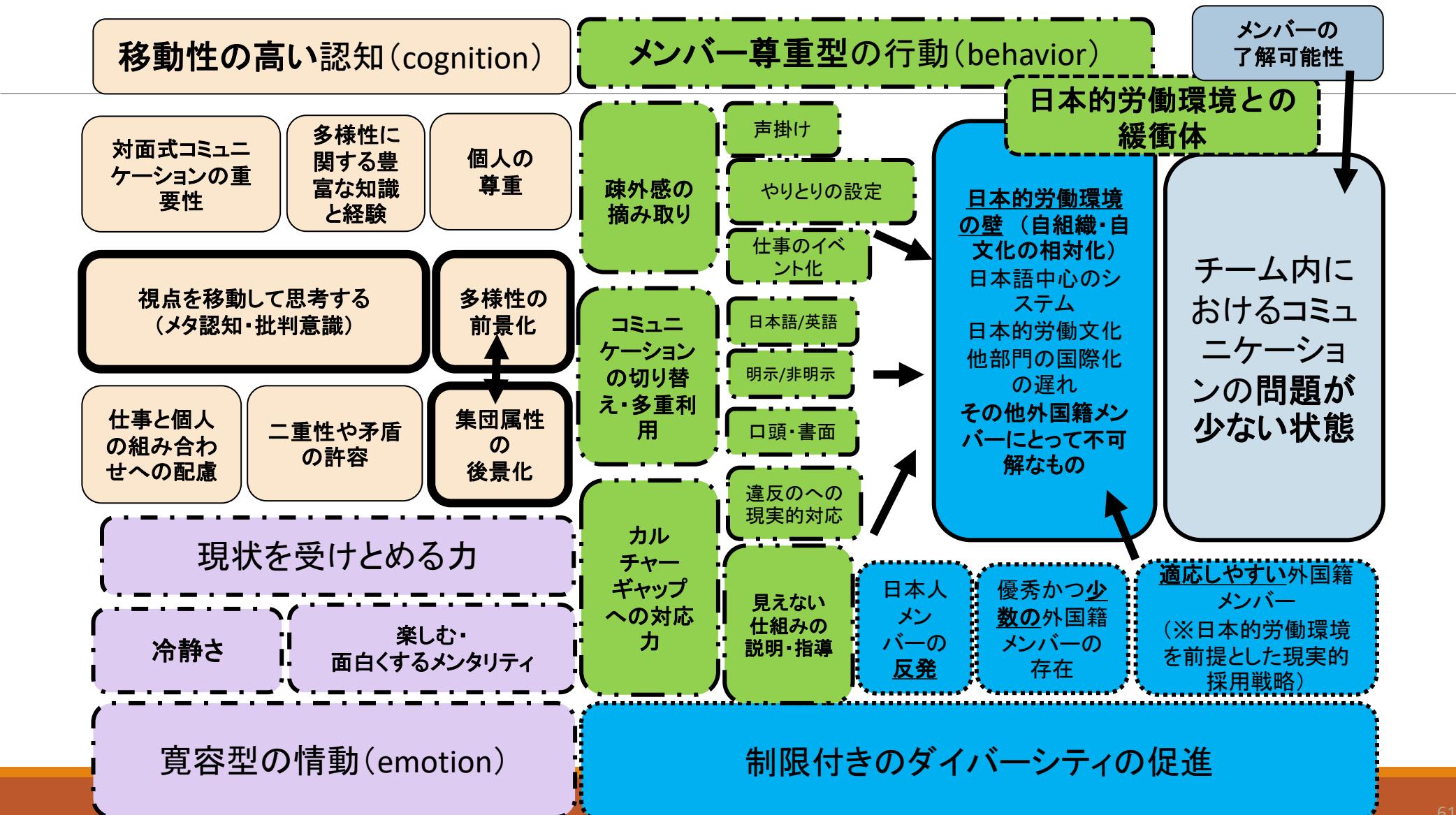
概念名：まさに言及指示的な「外国人に対する明示的指示の必要性」というものであったが、それを「異文化との差異を踏まえた明示的指示への切り替え」と書き換え、異なる文化間の関係性をより前景化して示す表現が可能となる。その関係性を踏まえ、上司が他者（部下）にあわせて指示の質を切り替える意識をもっていることをより明瞭に説明できる。

「定義」：「外国人に対しては明示的な形で指示をする必要性があること」としていたが、「明示的な指示が好まれる異文化と曖昧に指示がなされる傾向にある自文化の差異を踏まえ、異文化に合わせて明示的な指示を選択する意識をもっていること」と書けるだろう。

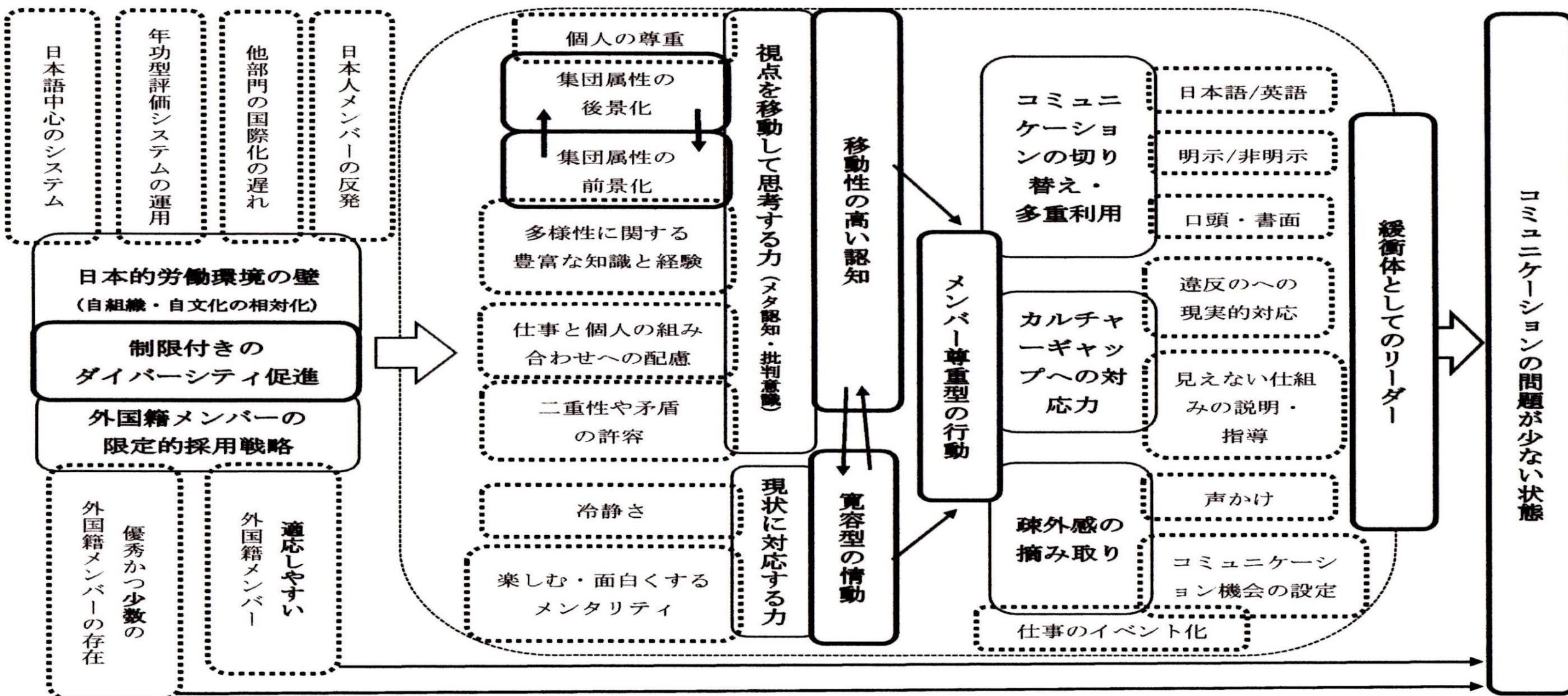
理論的メモ→理論的サンプリング

「理論的メモ」：「指示以外にも文化的な相違点があるのか？指示以外にも、褒める行為、助言、フィードバックなどに相違点があれば、指示に限定せずとも、文化的差異を踏まえた『メッセージ』の切り替えといったより包括的な概念ができるのではないか？」といった考察にもつながる。

調査結果(結果図)：多文化研究チームを機能させる日本人リーダーの認識世界(認知・情動・行動・周辺コンテクスト)



多文化研究チームを機能させる日本人リーダーの認識世界 (認知・情動・行動・組織的コンテクスト)



リーダーの認知的志向性のポイント：

制限付きのダイバーシティ促進という特徴・弊害が日本の労働環境下にある多文化チームの中心的な問題として認識されている（組織的コンテクストに関する認知）。

一方で、日本人リーダーが認識している一つの重要な「帰結」として、「チーム内のコミュニケーションにおいても大きな問題が顕在化していない状況」（→定着率の向上？）がある。

帰結があれば、原因（要因）があり、その帰結につながる原因となる3つのプロセスが介在している：

①移動性の高い認知（思考）②寛容型の情動 ③メンバー尊重型の行動

さらに、①、②、③は連動し、日本人リーダーが「緩衝体」として機能し、①～③が直接的、間接的に問題を大きくしない効果を生み出している。

とりわけ、③によって、外国籍メンバーの了解可能性（cf. 石黒, 2012）を高めていると推論できる。

メタ・コミュニケーション意識の養成

データに限らず、コミュニケーションをメタ・レベルから捉え、何がなされているのか考える習慣をつける

コミュニケーションの読み方

用語法：

- ・**日常表現からは浮き立つような違和感のある表現** 例：「連續体」
- ・**独自の言い方**「木を寝かす」
- ・**人、モノ、行為のカテゴリー、呼称** 例：「うちのおっさん」、「ちこいち」
- ・**代名詞** 例：「我々」「彼ら」
- ・**対照ペア** 例：「日本人」 vs. 「外国人」
- ・**形式的標識**(Chanfrault-Duchet, 1991)：自己と周りの社会(家族、組織、コミュニティ、全体社会)との関係を表す重要なフレーズ

例：「～しかなかった」「～せざるをえなかった」「当然のことだけど」→関係性：受容、妥協、あるいは反抗、拒絶、排除

⇒コミュニケーションの様々な箇所に共起する**解釈の土台(コンテクスト化の合図)**を探し、関係性や意味を同定する。

●いま・こここの会場での発表者のコミュニケーションの社会指標性をどのように分析・解釈できますか？

リフレクシヴィティ (Reflexivity,再帰的批判性)

「行為をする状況下において自己への気づき、およびその状況を構築する、自己の役割への気づき」

(ブルア&ウッド, 2009, p. 218)。

学問的な営み(自分の立場、研究対象、研究過程など)自体について内省的・再帰的に考察し続けること

(Wilkinson, 1988)

- 1) **個人リフレクシヴィティ**: 研究者としての個性、個人の興味・価値観と研究のつながりを批判的に検証し続けること。
- 2) **機能(研究実践)リフレクシヴィティ**: 研究の前提、価値、偏向を明らかにするため、研究の仕方やプロセスに対する批判的な検証を行い続けること。
- 3) **専門(領域)リフレクシヴィティ**: 専門分野特有の切り口、存在論、認識論、価値論、方法論などに対して批判的な検証を行い続けること。

前提:人々が見ている世界、生きている世界のロジック、用語の意味・使用法、感覚を拾い上げるうえで、学的知見、自らの常識・背景(自文化中心主義的見方)などが妨げとなる可能性あり

- みんなが研究者として持つ思考パターン、価値観などについて話しあってみましょう! 皆さんの認知傾向は、研究の目的を達成するうえで有効なものですか?

主要参考文献(1)

アンダーソン, H., グリーション, H. (著), 野村直樹(著/訳). 『協働するナラティヴ: グリーシャンとアンダーソンによる論文「言語システムとしてのヒューマンシステム』遠見書房.

バニスター, P., バーマン, E., パーカー, I., テイラー, M., ティンダール, C. (2008). 『質的心理学研究法入門: リフレキシビティの視点』(五十嵐靖博・河野哲也・監訳, 田辺肇・金丸隆太・訳)新曜社.

Bateson, G. (1972). *Steps to an ecology of mind*. Chicago, London: The University of Chicago Press.

Briggs, C. L. (1986). *Learning how to ask: A sociolinguistic appraisal of the role of the interview in social science research*. Cambridge, New York, Melbourne: Cambridge University Press.

ブルア, M., & ウッド, F. (2009). 『質的研究法キーワード』(上淵寿・監訳)金子書房.

Cresswell, J. W., & Plano Clark, V. L. (2011). *Designing and conducting mixed methods research* (2nd ed.) Thousand Oaks, CA: Sage Publications, Inc.

Charmaz, K. (2006). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis*. Los Angeles; London; New Delhi; Singapore; Washington DC: Sage.

Geertz, C. (1973). *The interpretation of cultures*. New York: Basic Books, Inc.

Glaser, B. (1978). *Theoretical sensitivity: Advances in the methodology of grounded theory*. Mill Valley: The Sociology Press.

Glaser, B. (1992). *Basics of grounded theory analysis: Emergence vs. forcing*. Mill Valley: The Sociology Press.

Glaser, B., & Strauss, A. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. New York: Aldine Publishing Company.

Goffman, A. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. New York, NY: Cambridge University Press.

井出里咲子(2003). 「場面の手がかり」小池生夫(編集主幹)井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修(編)応用言語学事典(p. 223)研究社.

井上逸平(2005). 『ことばの生態系: コミュニケーションは何でできているか』慶應義塾大学教養研究センター叢書.

石黒武人・山下早代子・川成美香(2012). 「英米語学科UCLA奨学研修参加学生の経験: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる説明モデルの構築」『明海大学外国語学部論集』第24巻, 109 -130.

主要参考文献(2)

石黒武人(2012).『多文化組織の日本人リーダー像:ライフストーリー・インタビューからのアプローチ』春風社.

石黒武人(2013).「異文化コミュニケーションの訓練・教育」石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション:多文化共生と平和構築に向けて』(pp. 207-230). 有斐閣.

石黒武人(2015).「異文化間の関係構築におけるトランスカルチャラル・アイデンティティの表出構造:映画『グラン・トリノ』において観察されるアイデンティティ・ワークの談話分析」『異文化コミュニケーション』

18号, 15-34.

石黒武人(2016).「現象の多面的理解を支援する「コンテクスト間の移動」に関する一試論:グローバル市民性の醸成に向けて」『順天堂グローバル教養論集』1巻, 32-43.

木下康仁(2003).『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂.

木下康仁(編著)三毛美予子・小嶋章吾・島末憲子・都筑千景・水戸美津子・佐川佳南枝・小倉啓子・酒井都仁子・岡田加奈子・中川薰(2005).『分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂.

木下康仁(2007).『ライブ講義M-GTA実践的質的研究法:修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂.

木下康仁(2009).『質的研究と記述の厚み:M-GTA・事例・エスノグラフィー』弘文堂.

木下康仁(2014).『グラウンデッド・セオリー論』弘文堂.

Kramsch, C. (1998). *Language and culture*. New York: Oxford University Press.

倉石一郎(2005).「リアリズムと構築主義」桜井厚・小林多寿子(編著)『ライフストーリー・インタビュー:質的研究入門』(pp. 46-47)せりか書房.

戈木クレイグヒル茂子(2006).『グラウンデッド・セオリー・アプローチ:理論を生みだすまで』新曜社.

西條剛央(2007).『ライブ講義 質的研究とは何か: SCQRMベーシック編』新曜社.

主要参考文献(3)

西條剛央(2008).『ライブ講義 質的研究とは何か: SCQRMアドバンス編』新曜社.

桜井厚(2002).『インタビューの社会学:ライフストーリーの聞き方』せいか書房.

桜井厚(2005).「ライフストーリーから見た社会」山田富秋(編)『ライフストーリーの社会学』(pp. 10–27)北樹出版.

佐藤郁哉(2008).『質的データ分析:原理・方法・実践』新曜社.

シルヴァスティン, M.・小山亘(編)・榎本剛士・古山宣洋・小山亘・永井那和(共訳)(2009).『記号の思想 現代言語人類学の一軌跡:シルヴァスティン論文集』三元社.

Strauss, A. (1987). *Qualitative analysis for social scientists*. Cambridge: Cambridge University Press.

Strauss, A., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*. New York: Sage Publications.

Strauss, A., & Corbin, J. (1998). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory (2nd ed.)*. New York: Sage Publications.

高木佐知子(2008a).「フレーム」林宅男(編著)『談話分析のアプローチ』(pp. 222-225)研究社.

高木佐知子(2008b).「メタメッセージ」林宅男(編著)『談話分析のアプローチ:理論と実践』(pp. 237-240)研究社.

梅本仁美(2008).「フッティング」林宅男(編著)『談話分析のアプローチ:理論と実践』(pp. 215-218)研究社.

Wilkinson, S. (1988). The role of reflexivity in feminist psychology. *Women's Studies International Forum*, **11**, 493-502.

ディスカッション / 質疑応答



ご清聴ありがとうございました。



連絡先 : takeishi@musashino-u.ac.jp

アナロジーに基づく一般化(西條, 2008, p. 107)
← 認知科学:ホリーク, K.J., & サガード, P(鈴木宏昭・河原哲雄(監訳), 1998)

アナロジーの三原則:

- 1) 対象を理解したい、という目的をもったとき(目的)
- 2) 直接似ている(直接的類似性)→対象となっている事象が直接似ている度合い
- 3) 構造が似ていること(構造の類似性)

Transferability 転用可能性(Lincoln & Guba, 1985, pp. 297-298)

※ 応用者が判断できる